
ただし情熱は鼻から出る

さや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ただし情熱は鼻から出る

【Nコード】

N2169Y

【作者名】

さや

【あらすじ】

人外ホストに胸キュンするだけの簡単なお仕事です。不定期更新となります。あらかじめご了承ください。

偏見まみれのホスト紹介

ようこそいらっしゃいませ。

本日のご指名はいかがなさいますか？

……………おや？

お客様。当店のご利用は初めてでいらっしゃる。

それでは、僭越ながら自分が簡単に説明させていただきます。

ここは欲望都市シルバーバレーにおいて、今もっともホットなホストクラブ「レジェンズ」です。

こちらでは、お客様の幅広いニーズにお応えできるよう、様々な人外ホストを取り揃えております。

来店毎にお好きなホストをご指名いただくシステムになっておりますが、特にご指名が無い場合は空いているホストが順次お相手させていただきます。

お客様のお眼鏡に適う者がいらっしゃれば幸いです。

ああ、そうだ。

指名率の特に高い5名がおりまして、フリーでの入店になりますとおそらく彼らが席に着く事は無いと思われますので、あしからず。

…おっと？

お客様は、その5名に興味がおありですか。なるほど。

では、自分の主観で恐縮ですが、彼らについて手短に紹介させていただきますでしょう。

まず、シルバーバレーの中でも最高のホストと呼び声の高い当店不動のナンバー1。

ミノタウロスの「タッチちゃん」さん。

身長190を超える巨体とそれを包む焦げ茶の毛皮、キリリとした深緑の瞳が特徴的です。

都市中のホストの憧れの存在で、渋く潔く思慮深く情に厚く、これぞ真の大人の男といった性格と見目は老若男女問わず人気があります。

かく言う自分も彼のファンでして……っと、失敬。説明に戻ります。

本気で入れ込まれるお客様も多いですが、しかし、彼を独り占めしようとする方は1人もいらっしやいません。

なぜなら、タッチちゃんさんの器が大きすぎるが故に、自らの手には余ると誰しもが考えになるからです。

次に、ナンバー2。リザードマンの「リッチちゃん」さん。

身長はだいたい200弱。レジェンズの中で一番背が高いのは彼です。

少し固めの緑の鱗と黒く鋭い爪は、どちらかといえばトカゲよりもワニを連想させますね。

最初に注意させていただきますと、彼はかなり強引なタチなので

ハッキリNOが言えないお客様にはあまりお勧めできません。

自分の事を俺様なんて言う時点で推して知るべしですね。

彼のお客様から聞いた話では、その強引なところが良いのだそうですが…。

…え？リツちゃんさんを嫌いなのかって？

ははは。まさかそんな。ははははは。面白い事をおっしゃる。

リツちゃんさんはナンバー1のタツちゃんさんにかなり傾倒していますので、彼の前でタツちゃんさんの話題を出すのは止めた方が良いでしょう。

良く言っても悪く言っても、長々とタツちゃんさんの話を聞かされる羽目になりますからね。

そして、ナンバー3がスケルトンの「スケルン」さん。

まあ………骨です。身長は185程度ですね。

間違つてスカルと呼ぶと少々機嫌を損ねてしまいますのでご注意ください。

とにかく女性の方が大好きなのだそうで、常にテンションが高いです。

ああ。女性が好きと言っても、本人の許可なくセクハラを行う様な弁えを知らぬ男ではございませんのでご注意ください。

彼と一緒にパ一ッと騒ぐことで、ストレス解消になるのだとおっしゃられるお客様も多いですね。

ノリが合わない或少々キツいかも知れませんが、ホストクラブという場を気軽に楽しみたい方などにお勧めです。

続きまして、ナンバー4。マンドレイクの「ドリー」さん。

レジェンズに数多くいるホストの中でも最年長なのですが、基本が植物なので見た目には年齢を感じさせません。

また身長が100センチ程度と非情に低く、その幼くも恐ろしい容姿と相まってどこかマスコットの的な扱いを受けています。

さらに、ドリーさんは自らを売り込む術を熟知しており、いい年してカワイコぶ…いえ、まるで無垢な少年のごとき言動にてお客様を誑か…ごぼつ、虜にしているようです。

彼は欲望に忠実かつおねだり上手なところがありますので、金銭面に余裕が無ければあまりお勧めできません。

何でもお客様によれば、そのブラックホールの様な真つ黒な瞳に見つめられると、どんな願いも叶えてあげたくなるのだそうですよ。

……え？

さつきから営業妨害になりそうな発言をしているけどいいのかって？

ええ、ええ、もちろん。我々はお客様第一をモットーにしておりますから。

心から楽しんでいただくためには、真実を隠蔽する様な真似は無粋の極みでしょう。

最後にナンバー5。マーマンの「パパン」さんですね。

身長は180と少々。黒目がちな瞳に、ロイヤルブルームーンストーン（薄い青みを帯びた宝石）のような光沢のある鱗。

滑らかな曲線を描く肉体はどこか中性的かつ神秘的な魅力があるとはお客様の談ですね。

どうもあまり目がよろしく無いようで、陸上ではいつもメガネをかけています。

非情におっとりした物腰の柔らかな人で、しょっちゅうお客様が

ら悩みや愚痴や相談などを受けているようです。

時折、店内の巨大水槽で泳いでいる姿が見られます。光の加減で虹色に輝くヒレが優雅に舞って、とても幻想的だと好評を得ております。

以上が、レジエンスのトップ5の説明になります。
いかがでしたでしょうか？

ちなみに、自分は新人の山田と申します。
この界限では珍しい、ただの人間でございます。
以後、お見知りおきを。

さて、お客様。本日ご指名のホストはお決まりましたか？
…それは結構。
では、どうぞ。ごゆっくり夢の一夜をお楽しみください。

………
………
…

「ご新規様、1名入りまあす！」
『いらっしゃいませえーーーーッ！！』

偏見まみれのホスト紹介（後書き）

2011.11.05みてみんなにキャラ落書き投稿済。

作者名か作品名で検索すれば出てきます。鉛筆クオリティにつき注意。

山田の先輩観察記

レジェンズに雇われてから早半月。

普通のホストクラブと違い、ホストそれぞれが好き勝手な格好をしている事にもようやく慣れて来た。

それはそれとして…。

先日、オーナーに先輩達を見て接客を学べと言われたので、まずは突出した指名数を誇る5人を観察する事にした。

正直、『ただし人外に限る』という条件が大半を占めている気がするので、本当に彼らを参考にして役に立つのか懐疑的にならざるを得ないのだが…まあ、ほんの少しでも収穫があればそれで良しでしょう。

とりあえず、今回は新規の客のあしらい方について注目してみた。

永遠の憧れタツちゃん先輩の場合

タツちゃん先輩は奇抜な服装で出勤する輩が多い中で、普通にスーツを着用している正統派だ。

ただし、その色はホストらしく紫だが…。まあ、似合っているから問題ないだろう。

絶妙にはだけられたブラウスから除く筋肉が何とも言えぬ男の色香を漂わせており、それを目にした多くの女性が悩ましげに感嘆のため息を漏らしていく。

瞳を潤ませ頬をほんのりと薄紅色に染めたその姿は何とも官能的だ。

存在だけで彼女らの『女』をこうまで引き出すタツちゃん先輩はさすがとしか言いようが無い。

ともあれ接客だ。

タツちゃん先輩は外向きに広げて座る足の腿に腕を置いて、軽く身を屈めた状態で話をしている。

おそらく、背の高いタツちゃん先輩がより近い位置で相手と顔を合わせて会話するために意識的にやっている事なのだろう。

パツと見では厳つい容姿をしているようでも、彼の纏う空気は優しく、傍にいとそれだけで何者からも守ってもらえそうな不思議な安心感がある。

「お前さん、こういう場所は初めてなんだそうだな。

慣れない場所で緊張するかもしれないが…まあ、ゆっくり楽しんで行くと良い。」

穏やかに目を細めながら紡がれる言葉に対し、当の女性は真っ赤になって何度も首を縦に振っている。

聞いたところによると、彼のその見目に相応しい重低音の声を間近で耳にすれば、それだけで腰が砕ける威力があるのだとか。

…もう存在自体が18禁だと言って差し支えない気がする。

緊張している客のテンポに合わせてか、ポツリポツリと会話をするタツちゃん先輩だったが、しばらくするとおもむろに席から立ち上がってこう言った。

「スマンが、他にも指名が立て込んでてな…。

なに、この店のホストは皆ベテラン揃いだ。悪いようにはならんだろう。」

不安そうに見上げる彼女の肩をポンポンと手の平で軽く叩いてから彼は別の席に移動した。

去り際に短い会話の中で把握したらしき、彼女の食いつきそうな

話題について引き継ぐタツちゃん先輩のやり方は実にスマートだった。

そのおかげもあってか、入れ替わりにやって来た新たなホストにたじろいでいた女性も段々と楽しげな表情に変わっていく。

とは言え、やはりタツちゃん先輩という存在の前には敵わないように、再び戻って来た彼が隣りに腰を下ろすと女性は明らかに先程よりも緩んだ表情を見せた。

帰る頃にはすっかり店内の雰囲気にも慣れたらしく、出口へ向かう彼女はどこか満足気な顔をしていた。

見送りに現れたタツちゃん先輩は、その表情を見て小さく頷きつつ最後にひとつ声をかける。

女性は、彼が無意識に行った腕を組む仕草に少しばかり見惚れているようだ。

…何と言つ反則フェロモン。

「今日は楽しめたか？」

あまり相手をしてやれなくてすまないな。

夜道は暗い。充分気をつけて帰れよ。」

意外にも彼は2度目の来店を促す様な言葉を口にはしなかった。

女性は自ら興奮気味に、再びこの店を訪れ彼を指名するのだと息巻いていた。

以後、彼女は1週間と空けずレジエンスに入り浸る常連となったのだが、そうさせたタツちゃん先輩を素直にすごいと思う。

自分は、いつかこの人に追いつくことが出来るのだろうか…。

傲慢トカゲことリッちゃん先輩の場合

やる気があるのか無いのか、リッちゃん先輩はよくＴシャツにジーンズ等といったラフな格好で出勤して来る。冬はそれにプラスしてレザージャケット着用だ。

それだけならまだ良いが、彼の腕や首には金色の装飾品が無駄に多くぶら下がっていて、それらが厳つい容貌と相まってチンピラのような雰囲気醸し出している。

コレを初見で指名するお客様の目は一体どうなっているのだろうか？

リッちゃん先輩はドカリと音がする乱暴さで女性の隣りに座ったかと思えば、足を組んで腕をソファアのへりにかけ踏ん返り返っていた。

時折、その太い尻尾を床にビタビタと打ち付けており無駄な威圧感を発揮している。

「よう。俺様を選ぶとは、お前なかなか目が高いじゃねーの。」

そして一言目がコレだ。

初っ端からどこまでも偉そうな男。自分ならこの時点で帰っている。

なぜ彼女はこんなチンピラの上から目線な言葉に対し、嬉しそうに微笑んでいるのだろう。

…全く理解に苦しむ。

リッちゃん先輩は女性から話しかけられるも、聞いているのかいないのか「ふーん」だの「あー」だの適当な相槌ばかり打っている。まあ、何だかんだでしっかり内容を覚えているのは、他の客を相手にしている時の言動で分かってはいるのだが…それにしても酷い。

かと思えば、彼女の話の遮っていきなりこんな事を言い出した。

「なー、お前さ。カラアゲ食いたくね？カラアゲ。

食いてえよな？よし、決まりだ。

おい、暇そうだな山田あ！カラアゲ2皿、すぐ持ってきて来い！客待たせんじゃねーぞ！」

いや、単にお前が食べただけだろ！

客がどうこう言うなら、リツちゃん先輩のソレは初見の相手に取る態度としてどうなんだよ！？

ああ…、この横暴に怒らないお客様はまさに神様だ。

むしろクスクス笑ってらっしゃるんですけど、それってどういう心境なんでしょうか？

是非ご教授いただきたい。

言いつけ通りにカラアゲを持って行ったら遅いと罵られた。くそ
う。

そして、隣の女性そっちのけでガツガツと獲物のほとんどを胃に収めたかと思うと、彼は大きく息を吐き、かつたるそうに立ち上がってヒラヒラと手を振りながら言う。

「ワリイけど、俺様売れっ子だからお前にばっか構ってらんねんだ。
………つて、ばあーか。

んな辛気臭えツラしてんじゃねーよ。イイ子にしてたらまた来て
やつからよ。」

ニヤニヤとした笑みを貼り付けて乱暴に相手の頭を撫で回すリツ
ちゃん先輩。

彼女の髪の毛をくしゃくしゃにしておきながら、彼はそれに構う
ことなくさっさと席から離れて行った。

あっさりと置いてきぼりにされた女性は、自らの髪を整えながら彼の背を名残惜しそうに眺めていた。

理解不能。全くもって理解不能。

それから一応とばかりに1度だけ席に戻って来たリツちゃん先輩だったが、自分の目には最後まで彼が好き勝手しているようにしか見えなかった。

いや、色々命令された腹いせに言ってるわけじゃないぞ。うん。彼女の帰り際、見送りに来た彼はいきなりその華奢な手首を掴んで至近距離から平淡に言い放つ。

「お前、絶対また来いよ。1週間…いや、5日だ。5日以内に来い。それで、次も俺様を指名しろ。分かったな？」

…これが噂に聞くオラ営（オラオラ営業の略。強引な接客スタイルの事）か。

無いわ。お客様に命令とかマジで無いわ。何より、その言葉に頬を染めて頷くお客様が1番無いわ。

結局、リツちゃん先輩から役に立ちそうな接客術を学ぶことはできなかった。

見る人が見れば何かが違ったのだろうか？…………謎だ。

骨骨ロツクなスケルン先輩の場合

スケルン先輩の事だ。性格同様、目に痛いド派手な服装をしているのかと思いきや、意外にも地味目の民族衣装のような服を好んで着ているようだった。

日によって趣向を変えているようだが、甚平やアオザイやチャイナ服などのアジアテイストの物が比較的多く見られる。

それはともかく。

正直、スケルン先輩の席に着くのは後の疲労が半端無いから気が進まない。

あまりにテンションが高すぎて、とてもじゃないが自分にはついて行けないのだ。

彼は新規の客である女性を見るなり、席に座りもせずに次々と奇妙なポーズを決めながら自己紹介を始めた。

「イエーイ！ご指名シーンキュー！

オレ、スケルン。よろしくーっ！」

ポーjingの際の骨同士がカツカツとぶつかり合う音まで鬱陶しい。

当の女性客は、初っ端から全力投球なスケルン先輩を目の当たりにして呆氣にとられてしまったようだ。

ポカンと口を開けた状態で固まっている。気持ちは分かる。

しかし、そんな彼女の反応が見えていないのか、スケルン先輩は矢継ぎ早に言葉を紡いでいく。

「新しい出会いにテンションマックスでサーシーン！もうね、女の子大好きすぎちゃってね！

ごめんごめん、オレ酔ってるわぁー！マジ酔ってる！キ・ミ・に！なんっつて！

はい、ドン引き！本いただきましたーっ！

…って、おおい！そんな遠くの席からツッコミとかいらねーし！愛が痛ってえわ！

あと、そっち！スベルンて呼ぶな、否定できねえーっ！」

…うるさい。そして、うるさい。

彼のマシンガントークのせいで当の女性客が完全に置いてきぼりにされているが、いいのだろうか？

ホント悪いねー等と軽く謝りつつ彼はどこか年寄り臭い動作で力シヤリと彼女の隣りに腰かける。

ようやくまともに接客かと思いきや、スケルン先輩の顔を間近で見た女性が唐突に爆笑し始めた。どうやら今までの言動が何気にツボに入っていたらしい。

何度か彼の顔を見ては笑いというのを繰り返していたが、5分ほど経つてようやく彼女も落ち着いてきたようだ。

その間、スケルン先輩は心配そうに声をかけながら肩で息をしている彼女の背を擦ったり、水を用意させたりと案外かいがいしく面倒を見ていた。

自分が笑われた事に対しては特に気にしていないらしい。

「っあー、ビビったーっ。めっちゃビビったー」。

オレが原因で笑死とか止めてー、マジでっ。洒落になんねーから！

いや、笑ってくれんのは正直すっげ嬉しいんだけどさあー。スマイルはハートのビタミンなワケだし？

でも、だからって、まさか面白すぎる事が罪になるとか思わねえじゃん！？

って、そーいや、こういう場合の罪状って何になるんだ？業務上過失致死？」

さすがに再び呼吸困難な状態に戻らないよう気を使っただ、彼は最初よりも若干テンションと声量を落として会話を始めた。

まあ、それでも自分にとっては充分騒がしいのだが…。

しばらくの間その調子で話し続けていた彼は、何を思ったのか急に勢い良く立ち上がって力強く叫び出す。

「そう、ここはオレのヘブン！そして、アルカディア！まさに、シヤングリラ！」

男に生まれて良かったぁーっ！

っつーわけで、ワリっ。ちよっ、異界の女神にお呼ばれしてるんで留守は頼んだ！」

ちよっという意味が分からないですね。…全く、どんな席移動の言い訳だ。

スケルン先輩はそのまま他の指名客の元へとスキップ交じりに去って行く。

女性は彼に向かって「いつてらっしやーい」などと言いつつ笑顔で手を振っていた。順応力ハンパ無いな、彼女。

その後はさらにすごかった。

自分の指名客を団体客用の席へと集めてハーレム状態を築いたスケルン先輩は、ご機嫌で上着を脱ぎ骨芸とやらを披露したり、全員で学生時代の懐かしい手遊びに興じたりと、まさにやりたい放題。ここが広大な店舗を持つレジエンスで無ければ、営業妨害で追い出されてもおかしくないんじゃないかと言っはしゃぎっぷりだ。

「いやぁー、楽しかった楽しかった！

良かったらまた来てよー。オレめっちゃ待ってるし！
そんじゃねーっ！」

女性の帰り際、右手を大きく左右に振り回しながら満面の笑みで見送るスケルン先輩。

彼女も未だ興奮さめやらぬといった風情で、足取り軽く帰路に着

いていた。

学ぶ事が全く無かったとは言わないが、ただ、この接客方法は彼にしか許されないものだと思う。

今度、オーナーにスケルン先輩のヘルプを減らして貰うように頼んでみようと思決意した夜だった。

ドS先輩に改名すべきドリー先輩の場合

植物だからと言ってなぜ裸ネクタイが許されるのか、その辺の警察官をとっ捕まえて小一時間ほど問い詰めたい。

通報されて然るべきだ。こんな世の中、間違ってる。

これは私怨では無い。先日、世紀末に生きるモヒカン男の真似を強要された私怨混じりの意見などでは断じて無い。

しょっ引かれて性格が少しでも矯正されれば良いのにかと思っ
ない。ちよつとしか。

ちよんつと飛び乗るように女性客の隣りに座って、足をぶらつか
せながら少年のような声で話しかけるドリー先輩。

「こんばんはーっ。ボク、ドリー。

今日はご指名ありがとねっ。」

小首を傾げる仕草が何ともあざとい。

女性も早速騙されているようで、可愛いなどと言いつつ瞳をきら
めかせている。

その様子に手ごたえでも感じたのか、彼は両手で口を押さえてク
スクスと笑いだした。

頭の上の花がそれに合わせて小さく揺れている。

「ふふ、ボクかわいいーい？」

お姉さんみたいなキレイな人に言ってもらえると、とっても嬉しいな。」

ぐあつ。と、鳥肌が…っ。自分の年を考えろオッサン。

なあにがお姉さんだ、何が。確実にドリー先輩より彼女の方が年下じゃないか。

軽く腕を擦りながらそんな事を考えた瞬間、女性の死角から彼の根が1本飛ぶように伸びてきて鞭のようにピシヤリと俺の背を打った。

痛いつ、ごめんなさいっ！

……うう、くそ。相変わらず、エスパー並みの悪口察知能力だ。後で精神的なお仕置きなどされなければ良いが…。

「ところで…。ねー、お姉さん。

ボクね、今すぐぐく飲みたいお酒があるんだけど、頼んでもいい？」

なっ！？

さすがドリー先輩、初手からおねだりなどと常人には出来ない事を平然とやってのける！

下から覗き込むようにジッと見つめられた女性は、たまらないといった風に頬に手を当ててあっさりと頷いた。

指名数に関しては上位3人から少しばかり離されているが、彼の1人あたりの売上はタッチちゃん先輩に優るとも劣らない、恐ろしい実力を持つ男だ。

どうも聞いた話では、ドリー先輩は女性の服装等からおよその手

持ち金額を推測するのが得意なんだとか。

何だかんだでその額を超過するような要求をしないところから、
ともすればカツアゲにも似た彼の行為は単なる可愛いおねだりとしてプラス方向に処理されるらしい。

「あつ！ボク他にも指名あるんだつた！
んと。ごめんけど、ちょっと行ってくるねー？」

女性を持ち上げつつたかりを繰り返したドリー先輩は、ある程度
それを消費したところでハツと気がついたようにそう言った。

媚び売りシヨタオッサンの「こぼしちゃったー」だの「食べさせて？」だのといったわざとらしい甘え姿をさんざっぱら見せつけられて、いい加減に胸やけがしそうだったこちらとしては大いに助かつゝ痛いっ、すみませんでした！

両足を揃えてテシツとソファーから降り、その短い脚をちょこちよこと動かしながら去って行くドリー先輩。

彼の計算され尽くした言動に、女性は小声で「可愛すぎる」だとか「持つて帰りたい」だとか呟きながら遠ざかる後姿を凝視したまま身もだえしていた。

本当に、自分の魅せ方というものを怖いくらい知り尽くしている草だ。

時間が来て名残惜しそうな態度を見せる女性に、ドリー先輩は無邪気な笑顔を向けて彼女の手の指をキュツと握り口を開く。

「また来てくれるんでしょ、お姉さん？
ボク、楽しみに待ってるからねっ。」

この女性客が、数日も経たない内に再び店を訪れたのは言うまでも無い。

とりあえず、彼を見ていて自分の売りというものを理解して伸ばす事の重要さはよく分かった。

後日、仕事終わりに呼び出されてヘルプについた際の心構えや具体的な指導が行われ……いや、それは正直ありがたい話だとは思う。しかし、その間中パンイチにネクタイという屈辱的な格好をさせられた意味はついぞ分からなかった。

マイナスイオン放出疑惑浮上中のパパン先輩の場合

パパン先輩は背や尾、手足にヒレがあるせいか、一見すると布地を身体に巻きつけただけのような、ゆったりとした服装をしている事が多い。

例えるなら、西洋の神話に登場する人物たちのような、そんな格好である。

彼は誰に対しても丁寧な物腰と細やかな心遣いを忘れず、常に冷静で、それでいて駄目なところはハッキリと駄目だと口に出せる人間の出来たマーマンだ。

まるで理想の上司のような彼を、例え同い年でも自分は先輩として1番尊敬している。

当然タツちゃん先輩も尊敬はしているが、彼の場合、別次元の存在と言うか憧れの存在に過ぎて、ただの先輩として扱うには何とも恐れ多い。

「こんばんは、隣いいかな？」

柔らかに微笑みながら女性へと尋ねるパパン先輩。

座る前にこうやって本人の了承を得ようとするのは、この店では彼だけだ。

「初めまして。良い夜だね。

僕の名前はパパン。どうぞ、よろしく。」

そう言っ、彼は右手を差し出し握手を求める。

すると女性は一瞬の躊躇のあと、恐る恐るその手を取った。

触れた瞬間、あからさまにホツとする彼女にパパン先輩は小さく苦笑いをこぼす。

「マーマンに会っのは初めてかな？

せつかくの機会なんだし、気になる事があれば何でも聞いてね。」

マーマンと言う種族は数があまり多くなく、さらに陸上生活を選ぶ者が少ないため、イメージだけが先行して色々と誤解されている部分があるのだ。

例えば、淋しいと死んでしまうというウサギのデマのように、やれ魚介類しか食べられないだの、やれ陸上では身体から常に粘液を放出しているだの、やれ満月の夜は銚子を持って襲って来るだのといった、根も葉もない噂が世間に広がっている。

全く根拠の無い話なのだが、身近にマーマンが存在しないがゆえに、それが嘘か本当か判断をつけられないまま信じてしまったり。彼の存在を知って、興味本位でレジエンスを訪れる客も少なくは無い。

好奇の目に晒される事は決して良い気分ではないはずなのに、パパン先輩はいつだって紳士的な態度を崩さず接客している。

今日も、傍から聞いていればかなり失礼な質問をいくつも受けていながら、彼はその全てに笑顔で答えていた。

「あつ…と、ごめんね。そろそろ他の席も回らなくちゃいけなくて…。」

また戻って来るから、そうしたら今度は君の話を聞かせて欲しいな。」

本当に申し訳なさそうな表情で言って、パパン先輩は他の指名客の元へと移動する。

ちなみに常連客が相手の場合、彼の元にヘルプがつく事は少ない。他のホストには聞かせられない様な、深刻な相談事をする人間が多いからだ。

きつと、彼の纏う敬虔な聖職者にも似た、どこまでも清廉な空気がそうさせるのだろう。

自分の中にある汚く醜い部分を彼なら丸ごと受け入れてくれるんじゃないかと、そんな希望を抱かせる何かがあるのだ。

現に席に戻って来たパパン先輩に自身の事を話し始めた女性も、時が経つにつれ内容が悩みを打ち明ける方向へとシフトして行った。途中で彼に目配せされて席を外したが…。

帰りの際、どこかスッキリとした表情を見せる女性にパパン先輩の素晴らしさを再認識する。

別れの言葉と共に小さく手を振る彼女に、彼は優しく微笑み告げた。

「辛くなったら、またおいで。僕はいつでもここにいるから。」

顔を少しばかり赤く腫らした女性は泣き笑いのような顔をして頷き、それから「ありがとう」と深く頭を下げて、自らのあるべき場所へと帰って行った。

ホストとして、また人間として、彼から学ぶべき事はきつといく

らでもあるのだろう。

胸の内でこっそり、こんな場所にいるより彼にはもっと相応しい場所があるんじゃないか…と思ったのは内緒の話だ。

山田の先輩観察記（後書き）

ちなみにりっちゃんが山田をこき使ったのは、常連になりそうな客だったから、双方に顔を覚えさせようとしたという超分かり辛い先輩心から。

人外会話集 タイマン編

トカゲと骨（営業中、店内フロア）

「オイ！うつせーぞ、スカル！おちおち話も出来やしねえじゃねーか！」

「誰がスカルだ、このハ虫類！オレは透ける…じゃねえ、スケルだ！大体、テメエのクソつまんねえ自慢話なんざ誰も聞いちゃいねーよ！」

「んだと！？脳が足りねえどころか入ってすらいねえ、どこもかしこもスツカス力骨野郎のクセしやがって！

貴様の無駄話が俺様の話より価値があるとでも思ってたのかよ！」
「人を骨粗鬆症みたいに言うんじゃねえーッ！オレの骨密度ナメてんのか、コラあ！」

「ああ！？意味分かんねえ事言ってるじゃねえよ、骨カス！そのヒヨロイ身体バラバラに分解してやるか？」

「おーお、上等だ！やってみろや、オラ！
テメエの邪魔くせえ尻尾ぶった切って再生するかどうか実験してやんよ！」

ひとくちメモ：2人の喧嘩は恒例行事

牛と草（営業中、休憩室）

「タツちゃん、またスカウト来たんだ？」

「ああ、ドリー先輩。まあ、そうですね。いつもの事ですよ。」

「ははっ、ボクたちにしたらそうだね。今回はどこから？」

獣人系のフアング？それとも筋肉系のビルダーズ？もしかして、
角系の一本鬼かな？^{いっぽんぎ}」

「いや、そのどれでもない。大地です。」

「あー、茶系のおそこ。最近落ち目なんだよねえ。」

にしたって、レジエンスから引き抜きしようだなんて冒険もいい
ところだよ。」

「それだけ必死なんでしょう。」

「…またこっそり援助しようだなんて、止めときなよー？
君ってば本当にお人好しなんだから。」

ひとくちメモ：ドリーは情報通

骨と魚（開店準備中、ロッカー）

「あ、スケルン先輩。約束の僕の鱗のプレスレット完成しましたよ。」

「おお、ついに！」

「うわーっ、やっぱりヤベエなお前の鱗！マジ嬉しいわ。ありがとな
ー。」

「いえいえ、この程度お安いご用です。」

「じゃ、これ報酬な。っーか、ホントにこんな安値で良かったん？
出るトコ出りやあコレの10倍はつくだろ？」

「大丈夫です。僕としてはむしろ、そっちの事実の方が重かったり
するんですよ。」

「ただの鱗なのにつて。」

「はー。欲がねえなあパパンは。どこの聖人君子かつっーの。
オレにやあ真似できねー。」

ひとくちメモ：マーマンの鱗は高値で取引されており、パパンの

鱗は中でも上質の部類に位置する

牛とトカゲ（営業終了直後、店内フロア）

「疲れてませんか、タツちゃん先輩！肩お揉みますか！？」

「…いや、必要ない。」

「分かりました！

あ、ノド渴いてませんか、タツちゃん先輩！何かお持ちしましょうか！？」

「…今はいい。」

「そうですか！

じゃあ、小腹は空いてませんか、タツちゃん先輩！何かつまめるもの用意しましょうか！？」

「リザード…。」

「はいっ！何でしょう、タツちゃん先輩！」

「……そういう気遣いは、できれば俺よりも後輩ホストたちへ向けてやれ。」

お前のやり方に口を出す気は無いが、おそらくこのままだと……

いや、老婆心だ。スマン。」

「いえ！ありがとございます、タツちゃん先輩！肝に銘じておきます！」

ひとくちメモ：リツちゃんは憧れの存在を前にすると興奮のあまりキヤラ崩壊を起こす

草と魚（営業終了後、ロッカー）

「ボクがこの国に来ようと思った切っ掛けはねー。んーと、水かな

あ。」

「ああ、それは僕もあります。ここの軟水、良いですよね。」

「そうそう、そうなんだよーっ。種類も豊富だしさあ。」

「そんでもって、たまーに温泉水なんかに手を出しちゃったりしてえ。」

「分かります分かります。僕は由布のものがお気に入りですね。」

「そこで別府に行かないあたり分かってるねー。」

「でもさ、何だかんだ言って最後は故郷のすっごいハードな硬水が恋しくなっちゃったりしてさ。」

「高い代金払って、わざわざ定期的に取り寄せたりしちゃうんですよ。」

「うわー！あるある、ありすぎる！で、パパンの場合だと海水？」

「ですね。ルートを確保するのに苦労しました。」

ひとくちメモ：2人は海外出身

骨と牛（開店前、店内廊下）

「タツちゃん先輩。チーッス！」

「スケルンか。…早いな。」

「いやあー、それが聞いて下さいよーっ。」

「久々にダチと飲んでたんすけど、途中で腐敗衆ふはいしやうの奴らとバツタリ会っちゃってえー！」

「プライベートだっつーのに、いつまでも引き抜きがどうこうウツセエもんで、飲み比べで勝たらって条件出したんすよ。」

「したら、勝ったはいいいけど結局オールになっちゃって！んで、寝る暇もなく身だしなみだけ整えて即出勤ッスわ！」

「ったく、冗談じゃねえ！時と場合を考えろっつーんすよね！マジ無いわアイツら！」

「そうか。」

「あつ、でも仕事に手え抜かねーッスから！」

「ていうか、オレが女の子前にしてテンションダウンとかありえねーっ！」

「……まあ、無理のない程度にな。」

「了解。つつつても、ワンオール程度余裕ッスよ！心配あざッス！」

ひとくちメモ：腐敗衆はアンデッド系ホストクラブ

トカゲと魚（営業中、手洗い場）

「……………」

「……………」

「……リッちゃん先輩。」

「あ？」

「この前はありがとございました。」

「はあ？んだそりや。意味分かんねえし。」

「僕がお客様から相談を受けていたから、スケルン先輩が隣の席で盛り上がっているのを諫めて下さったんですね。」

あのままだったら、大事な話を聞き逃してしまうところでした。

だから……、ありがとうございます。

リッちゃん先輩にはいつも憎まれ役を買って出ただけで、とても感謝しているんです。」

「別に、俺様はあの骨野郎が気に食わなかったただけだ。

勝手に変な解釈してんな、バあ力。」

「それでも、僕は助かりましたので。」

「……ふんっ。」

ひとくちメモ：ツンツンデレデレ

草と骨（出勤途中、道端）

「ハロー、スケルーン？」

「ゲッ、ドリー先輩！」

「おやあー？先輩に向かってゲッてのは無いんじゃないかなあー？君が先日のオール帰り、酔って電柱を必死に口説いた挙句、情けなくもゲロっちゃった事…」

皆にバラしちゃってもいいのーお？」

「おわあーっ！ちよっ、まっ、止めて下さい！謝ります！謝りますから！」

「つーか、毎回毎回そんな情報どっから仕入れて来るんスカ！」

「くすくす。ボクは何でも知っている。

ということ、黙っていて欲しかったら今度リバイブのコース奢ってよー。」

「リバ…、ってあのメチャクチャ高い創作料理屋！？

勘弁して下さいよ、もーっ！」

ひとくちメモ：リバイブはあまりの美味しさに死人すら蘇るとい
う伝説を持つ料理人の店

牛と魚（帰宅途中、車内）

「すみません、タツちゃん先輩。いつも送ってもらっちゃって。」

「構わんさ。それより、お袋さんは元気か？」

「ええ、おかげさまで。術後の経過も順調で、年内には退院も出来るだろうつてお医者様が。」

「そりゃあ良かった。退院した暁には、何か祝いの品でも贈らせてもらおう。」

「ありがとうございます。……………何もかもタツちゃん先輩のおかげです。」

「いや…。お前さんが自分でチャンスを掴んだんだ。俺はその手助けをしたに過ぎねえさ。」

「でも、僕には無くてはならない手助けでした。この恩は一生かけてでも返させていただきます。」

「…難儀な性格だ。」

「でも、それが僕の良い所なんでしょう?」

「ふ…、違うない。」

ひとくちメモ：タツちゃんの愛車はランボルギーニカウンタック

トカゲと草（営業中、店内廊下）

「リツちゃん。ちょっとそこ通るから、尻尾の向き変えてもらっていいかな?」

「あ。スミマセン、ドリー先輩。」

「そうそう、そういえばね。」

昨日、スケルンにリバイブのコース料理奢ってもらっちゃったんだ。」

「…骨野郎に? ドリー先輩が?」

「うんつ。」

さすが、ナンバー3だけあって彼つてば太っ腹だよねえー。いやあ、美味しかったなー。」

「だったら今度、アイツより売れてる俺がもっと良い所に連れて行ってあげますよ。」

空いてる日、教えてください。」

「えっ、ホントっ!？」

やったあー! やっぱり持つべきものは優秀な後輩だねっ!
スケルンよりよっぽど頼りになるや!」

「ふっ。まあ、当然です。」

ひとくちメモ：×ドリー策士↓。リツちゃんギザチヨロス

フラグイベント発生中（前書き）

モブ女性視点。分岐先で出会ったホストの常連という設定になります。

フラグイベント発生中

今日は久しぶりのお休み。

たっぷり睡眠を食った私は、ちよつと遅めの朝食を摂りながら何気なく窓の外を見た。

雲一つない青空の下で小鳥たちが無邪気に戯れている。…のどこかわあ。

うーん。お天気もいいみたいだし、せっかくだからどこかに出かけてみようかな。

思い立ったが吉日って言うし。…さて、どこに行こう。

↓『商店街』

『公園』

『コンビニ』

『ホームセンター』

『書店』

とりあえず、商店街に行ってみよう

近場だし、とりあえず地元商店街をひやかしに行ってみる事にした。

平日だからかそれとも中途半端な時間帯だからか、人はそんなに多くない。

それにしても、シャッターを閉じているお店も結構あるなあ。

大手のスーパーやデパートなんかにお客を取られているんだろうけど、昔から利用してた身としては頑張っただけだと思ったり思わなかったり。

なんて考えていると、前方から見覚えのある焦げ茶のミノタウロスが歩いてきた。

って、うつそ、タツちゃん！？うわわわ、本物のタツちゃんだよーっ！

まさかこんなところで会えるなんて、私ってばなんてラッキー！早速、話しかけちゃおうっ。

「タツちゃん、こんにちわー。」

お昼過ぎに出歩いてるって事は、今日はお休みなの？」

軽く手を振りながら小走りで近付き質問を投げかける。

「…ああ。」

私の存在に気がついたタツちゃんは、全部をひっくり返していつもの超絶色気のある声で一言返事をくれた。

あーもうっ、これだけで腰が砕けちゃいそうだよ。耳元で囁いてくれたりしないかなああ。

それに、プライベートだから当たり前なんだけど……しっ、私服とか刺激が強すぎるうー！

白いVネックの服から覗く鎖骨と胸筋、そしてその半袖から伸びる筋張った逞しい腕。ピタリとしたジーンズに包まれたキュッと引き締まった形の良いお尻と相変わらず全身から垂れ流しになっているフェロモン…どうにも興奮が止まらないゴホンゴホンっ。ちっ、違っ。私は恥女じゃない、恥女じゃないっ。

「お前さんも休みか？」

挙動不審に頭を振り出した私を変な目で見る事も無く、タツちゃん話を続けてくれた。

ハッとして彼の顔を見つつ返答する。

「あつ、うん。そうなの。暇だし商店街でも見て回ろうかなって思ってたんだけど…」

タツちゃんはこうしてここに？」

「……この辺りは一人暮らしの年寄りが多くてな。

無事を確認するためと、後は少しでも慰めになればと話を聞いて回っている。」

年寄り羨ましいー！

不謹慎かもしれないけど、でも、半年先まで予約いっぱい中断される事しよっちゅうのタツちゃんとプライベートで話せるなんてズルすぎるよ！

たった数分の逢瀬のために、私を含む彼のお客がどれだけ苦労しているか…

そこまで考えて、ある事に思い至った私は彼を見上げて手を組みこう言った。

「あ…あのね、タツちゃん。私、今日暇なの、すごく。」

さすが、その言葉の意図を正確に察したタツちゃんは、小さく苦笑いにも似た笑みをこぼしながら期待通りのセリフを口にくしてくる。

「……一緒に来るか？」

たまには違う人間もいた方が皆も喜ぶだろう。」

「行くつ、行きたい！ありがとっ、タツちゃん！」

その後の時間はまさに天国。間違いなく人生で一番素晴らしい休日をご過ごせたと思う。

そんなこんなで、得難い幸せの余韻に浸ったまま私は一日の幕を閉じたのだった。

ここは公園でお散歩が無難かなっ、と

ポカポカとした陽気を受け止めながら、森林公園をのんびり歩く私。

たまにジョギングをしている人とすれ違ったり、私と同じく散歩を楽しんでいるお年寄りとすれ違ったりしながら、さわやかな空気を満喫していた。

はずなのに……どうしてこんなことになったんだろう？

「やめてくださいっ、迷惑です！」

「別に命取るうってんじゃないんだからさあー。」

「そうそ、ちょーっと一緒に気持ち良くなるって言ってるだけじゃん？」

木々が生い茂っていて薄暗い細道を通りかかった時に、だらしない学生服を着崩した、いかにも不良と言った風体の男二人に絡まれた。

逃げようと踵を返すと、さらに仲間と思わしき金髪男が一人、道を塞ぐように現れる。

その金髪男の後方には見張り役らしきスキンヘッドの男が細道の

先に立って辺りを警戒しているのが見えた。

どーりで急に人がいなくなったと思ったら……皆はこういった輩の溜まり場になっていると知っててこの道をわざわざ避けていたんだ。

三人の男に腕を引っぱられ、力づくで林の奥へと連れ込まれそうになった私は咄嗟に叫び声を上げた。

「やあぁっ！誰かつ、誰かぁーっ！」

「っあー、ウルセエッ！」

抵抗を続ける私にイラついていたのか、男の内一人が私の顔を目標けて拳を振りかぶった。

ヒツと喉を引きつらせながら、ほとんど反射的に硬く目を閉じる。だけど、覚悟した衝撃は訪れずかわりにとても聞き覚えのある声が耳に入ってきた。

「なあーに、んなトコで絡まれてんだお前は。ったく、メンドクセエ。」

「なっ！？誰だテメエ、見張りはどうした！？」

「は、見張り？……ああ、あのハゲガキか。アイツなら逃げたぞ。偉っそうにこの俺様の行く手を遮りやがったんで睨んでやったら、そりゃもう脱兎のごとくな。」

何が起こっているのかと恐る恐る目を開けた先に立っていたのは……リツちゃんだった。

いつも通りのラフな格好で、片手にお茶の入ったペットボトルを遊ばせている。

鋭い目つきと光沢のある鱗が相変わらずセクシ……じゃなくてっ！

「えっ、りっ、リツちゃん！？」

「あん？他に誰に見えるってんだ、コラ。」

俺様みてえな最高ランクの男がそこらに転がってるワケねえだろ。

「

女相手でも容赦なく牙をむき出し不機嫌さを露わにしながら、彼はナルキッソスさながらのセリフを恥ずかしげもなく言い放った。

あー、間違いなくリッちゃんだわコレ。

「何が俺様だ。頭イカれてんじゃねーか、オッサン。」

「三人相手に勝てるでも思ってたんのか？」

「ケツ、ヒーロー気取りがスカしやがって……切り刻んでやる！」

吠える不良たちはそれぞれナイフを取り出し、揃ってリッちゃんに向かって行った。

危ない！と思う間もなく彼らは丸太のような何かによって横薙ぎにされ、勢いよく吹っ飛ばされる。

「雑魚が……。俺様に楯突こうなんざ百万年早えつつの。」

ビタンつと太く硬い尻尾を地面に打ち付けながら、リッちゃんは嘲るように言った。

当の不良たちはみんな気絶してしまっただけ聞いていないけど、そこは別にどうでもいいんだろうなあ。

それから彼はチラリと私の方を見ると、フンつと鼻を鳴らして片手をズボンのポケットに突っ込む。

「オラ、さつさと歩け。またゴミが湧いても知らねーぞ。」

「え、あ。う……うん。あの、助けてくれてありがとう。」

「あー、いらねえいらねえ。」

礼がしてえってんなら、んな一円にもならん言葉より店来て売上

に貢献しろ。

骨野郎が最近客数伸ばして来てっかな。差あつけてえんだよ。」

何だかんだ文句や愚痴を言いつつ、リツちゃんは私を家まで送り届けてくれた。

怖い思いもしたけど、こんな役得があるなら悪くなかったかも？
なあんで、呆れた事を考えちゃったのは彼には内緒だ。

今度お店に行った時は彼の好きなカラアゲを沢山注文してあげよう、と思いながらその日の床とこに就いた私だった。

やっぱり暇つぶしならコンビニだよね

自宅から歩いて十分程度の場所にあるコンビニエンスストアへお財布片手に出かける私。

店内に入って最初に雑誌コーナーへ向かうと、そこに見知った骨の人がいた。

「あれっ、スケルン？」

「ん？…おおっ、こんなところで会うなんて奇っ遇じゃーん？」

声をかけると、スケルンは立ち読みしていた雑誌を棚に戻しながらカタカタと白く細い手を左右に動かした。

一応TPOは弁えているのか、いつものように大きな声でしゃべったりはしないみたい。

「いやっ、むしろコレ運命かもしれねえな。

っーか、やっべえ。だったら、オレ運命の女いすぎだしっ。

さすがイケてるメンズの人生はハーレム完備ってか。ツフーウ。
将来は、一夫多妻の国にみんなで移住とかしてみちゃうーう？」

彼は話しながら拳を握ったり、額に手を当て膝をついてみたりと
様々なポーズを取っている。

そんな言動に楽しい気分になせられながら、私は両手の平を合わ
せて笑った。

「あははは、ごつめーん。私、スケルンとは遊びだからあ。」

「オーマイガーッ。」

マアジでえーっ。オレ、もてあそばれてたのかよっ。ううわ、シ
ョックでけえーッ。

……ん？いやでも、良く考えてみつと『ピチピチギヤルに遊ばれ
ちやうオレ』とかそれはそれでオイシイ立場？

おうっ、ある意味勝ち組っぽく思えてきたっ。有りじゃね？」

うーん、マシンガントークと忙しい身振り手振りは仕事以外で
も変わらないんだなあ……。

なんて妙に納得しながら一人頷いている間に、もうスケルンは別
の話題に移っていた。

「実はオレ、コンビニの限定商品とか新商品とか試すのが好きでさ
あ。しょっちゅうチエックに来てんの。」

あ。ちなみに、この新発売のカップ麺オススメだぜー。」

「へえ……。じゃあ、試しに買ってみようかな？」

「イエアっ、行っちゃえ行っちゃえっ。」

知らない間に消えてる事も少なくないからなあ。一度は買つとい
て損無いぜー。

この前なんかも、売れ行きが悪かったのか気に入ってた駄菓子が
入荷しなくなってたさあ。

「いーやあー、アレは泣いたねーっ。他の店にも無いみたいで、大人買いしときゃあ良かったってスツゲエ後悔したわ。」

その後も彼に促される形で、普段になくカゴいっぱい商品に詰め込んでしまった。

合計金額を表示された時にいくら何でも調子に乗りすぎたかなあ
と反省していたら、隣りに立っていたスケルンがスツとレジに一万
円を置く。

「えっ、スケルン!?」

「つつーか、オレのオススメなんだし払うに決まってるっしょ。」

これでもし後になって損したーって思われちゃったら気分悪いじ
ゃん?

他人の感性ってやっぱ違うかなあ。

ま、いつも店に来てもらってるお返しってことで、ここは素直に
奢られちゃおうぜ。なっ。」

それから少し悶着があったりしつつも、結局最後は彼に押し切ら
れてしまった。

しかも、『んな重い荷物、女の子に持たせるわけにやあいかなー
だろ!』というスケルンの主張の元、徒歩圏内だと言うのに彼の車
で送られた上、玄関先まで荷物を運んでもらうという結果に…。

せっかくだからお茶でも飲んで行かないかと提案したら、ピチッ
と軽くおでこをはじかれて『こあら、男を簡単に家にあげようとす
んのは感心しねえーよ?いくら相手がオレだつってもな』なあん
て苦笑いされて、ちよつとビックリ。もちろん、彼は家に上がらず
そのまま玄関でサヨナラした。

お店で会う時とはまた少し違った女の子扱いを受けた事で、何だ
か仲の良い男友達が急に男になったみたいに感じてドキドキしちや
った。

お返しのお返しというのも変だけど、ちょっと来店回数増やしてみようかなあ。

そんなことを考えながら、私の休日は終わりを告げたのだった。

たまにはホームセンターも面白いかも

市営のバスに乗って、久しぶりに家から少し離れたところにあるホームセンターを訪れた。

最初にペットコーナーで犬や猫の愛らしい姿を堪能して、それから家具を見つつ恋人もいないのに結婚後に住む家を想像して楽しむ。その後も掃除や調理の便利グッズをひやかしたり、そういえばと無くなりかけていた消耗品等をカゴに入れたりしながら店内をあちこち巡った。

そして、気まぐれに何か植物でも育ててみようかななんて園芸のコーナーに行ったところで予想外の人物に会う。

「やつほーっ。珍しいねえ、お店以外で会うなんて。」

「えっ……あ、ドリー君っ。」

手の平サイズの小さな鉢に入ったサボテンを見比べていると、背後からニコニコ笑顔のドリー君に声をかけられた。

相変わらず、かあわいいいいい。

吸い込まれそうなほど真っ黒で大きな瞳。ハチミツみたいな甘いボーイソプラノの声とそれを紡ぐ小さなお口。赤ん坊もかくやのフニフニおててに小動物っぽい仕草。

この愛らしさ、さっき見た動物たちなんか目じゃないわあ。

もし、ペットコーナーに彼がいたら間違いなく買う。借金してで

も買っ。

仕事から帰った時にお出迎えしてくれたら、一発で疲れが吹っ飛ぶだろうなあ。

毎日、お膝の上でこの子を可愛がれたらどれだけ癒されるか……って、いけない。危険思想だわ。自重自重。

「どうして、ドリー君がここに？」

「ボクはねえ、自分用の肥料を物色中なのー。」

ぴちぴちのお肌を保つのも案外大変なんだよーう？」

肥料で肌を保つって、一体どういうこと？…と疑問が湧いたけれど、すぐに彼の種族を思い出した。

「そつかあ。マンドレイクって確か植物だったもんね。

何だか、ドリー君とホームセンターってイメージが違うから驚いちゃった。」

「そーお？結構、頻繁に来てるんだよー。」

…ところで、お姉さんは何を選んでいたの？」

プリティーに小首をくりつと傾げて問われたので、私は内心身悶えしながら両手に持っていたサボテンを見せつつ答えを返す。

「ちよつと部屋で植物でも育ててみようかなって思っで。」

「それでサボテン？育てる対象としてはツマラなくなあい？」

「んー、私ってズボラなのよ。

水やりを毎日なんて絶対忘れちゃいそうだし、だからって枯れたら可哀相じゃない？」

「なるほどー、お姉さんってば優しいつ。さすがボクの常連さんつ。とりあえず、その二つだったらこっちの方が良いと思うよー。」

そう言いながら、ドリー君は短く丸っこい指を私が右手に持っていた鉢に向けた。

左手のサボテンを棚に戻して、残った身の薄いサボテンを見ながら小さく頷く。

「……そうね、ドリー君がそう言うならこれに決めちゃおうかな。」
「ふふっ、ありがとー。」

最初に気合いを入れて水やりして根腐れさせちゃう人がいるからお姉さんも気を付けてねっ。」

「うん、分かった。気を付ける。」

「だてに植物やってないし、何かあったらボクいつでも相談にのるから。」

「あつ。だったら、その……今……でも、いいかなあ。私、本当に初心者で。」

水やりの頻度とか量とか、あと置く場所とか……とにかくこの子のために必要な事、全部知りたいの。」

せつかく彼に選んでもらったサボテンを自分の無知で枯らしたくなかった私は、恥を忍んでこの場で育て方を教えて貰えるように頼んでみた。

すると、ドリー君は嬉しそうに微笑みピツと人差し指を口の前に立てて言う。

「くすくす。お姉さんて、本当カワイイよね。
いいよっ、今から教えてあげるっ。」

それから二人で店内のベンチに移動して、じっくりサボテンの育て方をレクチャーしてもらった。

途中で飽きないようにか合間合間に関係無い話を挟みつつ、彼は初心者のお私にも分かりやすく説明してくれる。

そして数時間後、お礼と言うには安いかもしれないけれど、彼の買う予定だった肥料の代金を払って二人揃ってホームセンターを出た。

子供のように小さな手なのに驚きの力強さで肥料二袋を片手に抱えたドリー君は、空いているもう片方の手を振りながら私がバスに乗るのを見送ってくれる。

その帰りのバスの中で、買い物袋からサボテンを取り出し眺めつつ『説明中のドリー君は何だかいつもより大人っぽく見えて……いや、実際大人なんだろうけど、普段少年にしか見えないからすごく新鮮だったなあ』などと一人ニヤニヤしてしまう私だった。

そういえば、最近書店に行ってなかった

小説の続き出てるかなあと思いつながら駅前の大きな本屋に足を運んでみる。

各コーナーをチラチラと覗きながら移動していると、料理本のコーナーにパパンさんがいた。

ムーンストーンのようなツヤツヤの鱗がお店の照明に反射して、月明かりのように淡く光りを放っている。

うーん、何だか彼のいる場所だけ別世界みたい。背後に古代神殿とか幻視しそうだわあ。

見惚れついでに、その場で足を止めて観察してみる。

何か探しているのか、彼は適当な本をパラパラとめくっては棚に戻しを繰り返していた。

腕から伸びた虹のようなヒレがフワフワ舞ってちょっと邪魔そう。プライベートだしようしようか迷ったけれど、結局好奇心に負けて声をかけてみる事にした。

「パパンさん…って、料理されるんですか？」

その声にパパンさんは見ていた本から顔を外し、そして、私の存在を確認するとフワリと優しく微笑んだ。

「ぶあつ、まつ、眩しいつ。笑顔眩しいつ。ひーつ、浄化さーれるうーっ。」

「やあ、こんにちは。」

「そうだね。家庭料理レベルのものなら結構色々作れるかな。」

「へえー。…いいなあ。パパンさんの手料理、食べてみたい。」

「ふふ…、光栄です。」

でも、特定のお客さんを贔屓してるって思われちゃいけないから

「……ごめんね。」

「わつ、そんな申し訳なさそうな顔しないで下さいーっ。」

ただ適当に思った事を言っちゃっただけで、本気でねだろうとか考えてないですよっつ。」

小さく頂垂れ色つぽく伏し目がちになるパパンさんの姿に慌てて首を横に振れば、彼はホッとしたように笑った。

「うーん。本当に純粹というか何というか。清濁入り乱れるこの国にあつて奇跡みたいな人だわ。」

なんとなく料理の話題を続けにくくなったので、他に気になった事を聞いてみる。

「ところで、パパンさんは今日お休みなんですか？」

「ああ、うん。だから何か本でも買おうと思つてね。」

色々見て回つてたところなんだ。」

「あつ、私も一緒です。久しぶりの休みだから、小説の続きを買いに来たんですよ。」

「小説かあ。差支えなければタイトルを聞いても？」

その後の会話で分かったけれど、どうやら彼は結構な読書家らしかった。

なるほど、だてに眼鏡をかけてないって事かあ……。って、何か違う？

私が購入予定の小説も読んでいるようで、しばらくその話で盛り上がった。

彼から自分に無い視点での考察なんかを聞くと、そんな見方があったのかと目から鱗が落ちるような思いがして、また改めて一から読み直したくなってくる。

いつになく楽しい時間だった。

それから、ある程度会話が終息すると、私たちは一緒に小説コーナーへ向かいオススメの作品を教え合った。

案外、嗜好が似ているのか既読が多い。

それが何度か連続すると段々可笑しくなってきた、ついには二人でクスクスと笑い出してしまった。

「はーっ、こんなにオススメがカブるなんて思わなかったなあ。

でも、意外です。パパンさんって、結構残酷な話も読まれるんですねえ。」

「うーん、確かに読んでいて辛くなる時もあるけど……。」

それが人という種の逃れられない性であり罪であるのなら、僕はそこから目を逸らすべきではないと思うんだ。

人間の良いところも悪いところも、みんな受け止めた上で好きだつて言いたいからね。」

そう告げると、彼は私に向かい慈愛に満ちた笑みを浮かべた。

……いや、あなたどこの聖人君子ですかー。と思っただけど、パパ

ンさんなら仕方ない。

博愛主義って、この人のためにある言葉なんじゃないかしら。とりあえず、どう答えたら良いのか分からなかったので曖昧な笑顔を返しておいた。

ふと時計を見ると、もう結構な時間が経っている。

せっかくの休日を邪魔して申し訳ない気持ちになりながら、私は目当ての本を片手に彼と別れた。

本当、なんでホストなんてやってるのかなあパパンさん。

まあ、彼目当てでお店に通ってる私としては、今さら他所に行かれたらすごく困っちゃうワケだけど…。

そんなとりとめのない事を考えつつ、帰り道をてくてく歩く私。相手にとってどうかは分からないけど、自分にとってはすごく有意義で充実した時間だったと思う。

素直に『明日からも頑張ろう』と、そう思えた休日だった。

ファン会報より抜粋

ファンクラブ会員の皆様、ご機嫌麗しゅう。レジェンズ新人、人間の山田でございます。

今回、初の会報記事作成とあいなりまして、気合いを入れてトッブ5の皆さんを集めてみました。

会談形式にしようと思いきや無理を言っただけで時間を取っていただいたのですが、今さらながら1人ずつにすれば良かったと後悔しております。

円形のテーブルに自分、パパン先輩、リッちゃん先輩、ドリー先輩、タツちゃん先輩、スケルン先輩（以下、山、魚、ト、草、牛、骨と表記）の順に座っているんですが、どうしてもか圧迫面接のような息苦しさを感じずにはいられません。

席順に関しては、自分の独断です。現在の空気を変えるためにも、早速ですが質問に入りたいと思います。

山：えー、質問その1。皆さんの休日の過ごし方は？…っあ、回答は時計回りをお願いします。

魚：僕は本を読んで過ごす事が多いかな。今はスター新一作品を読み直しているところ。

ト：俺様は特に決まってるねえな。しいて言やあ、適当に外ブラついでる事が多いか。

骨：ハッ。何だそりゃ、暇あもてあました中坊かつーの。

ト：…んだと？…もっぺん言ってみろ、骨野郎。

テーブルを挟んで睨み合う骨とトカゲ。山田は命が惜しいので仲裁には入れません。

草：はいはい、ソコ。初っ端からケンカしないのっ。ボクはよくホームセンターに行ってるよ。

牛：……休みは大抵、知り合い訪ねて終わりだな。

骨：オレはコンビニ巡りしてるわ。話題のモンスター肉まん、普通に美味かつたぜーえ。

ト：くっだらねえ。人の事どうこう言えたギリかよ。

骨：ああ？…っテメエ、コンビニ商品の入れ替わりの激しさナメてんのか？

牛：止める。リザード、スケル。

牛に諫められて、トカゲはチツと舌打ちをし骨は鼻をフンと鳴らして同時に顔を逸らす。

営業中の彼らのケンカを誰も止めないのは、すでに名物になっているからでしょうか。まあ、それを楽しみにされているお客様も少なからずいらつしやいますしね。

山：気を取り直して質問その2。ずばり好きな女性のタイプは？

骨：って、おまつ。そういう質問は最後の方にとつとけよっ。

山：えっ。

ト：ったく。んな事も分からねえくせして上位陣集めるたあ、大した度胸だな山田あ？

山：ひいーっ！

魚：まあまあ…。彼、初めてですし。そこまで完璧を求めなくてもいいんじゃないでしょうか？

草：えー、甘あい。砂糖菓子より甘いよ、パパン。教育は最初が肝心だよー？

魚：そう言うことなら、僕が後でこういった場合のセオリーをちゃんと教えておきますから。

山：ぱっ、パパン先輩いーっ！

一同、ため息。

魚：じゃあ、質問の答えだけど…実は良く分からないんだよね。とりあえず、優しい子…かな？

ト：面倒臭くねー女。

草：うーんとねえ、スターチスの花みたいな子？

山：スター…何とかって、どんな花なんですか。

草：あはっ。ボク、自分で調べもせずになにに人に聞いちゃう男ってきらい。

山：スミマセンでした。…タツちゃん先輩お願いします。

牛：…特にないな。

骨：オレもねーなあ。敢えて言うなら、オレを好きでいてくれる子はみんなタイプだぜっ。（親指立ててドヤ顔）

山：えーっと、はい、ありがとうございました。

沈黙。ペラリと質問の紙をめくる音だけが部屋に響く。

山：続いて質問その3。趣味と特技を教えてください。

魚：趣味は読書、特技は泳ぐ事。…うーん、あんまり面白くなくてごめんね。

山：…とんでもない。普通に答えていただいて結構ですから。じゃあ次、リッちゃん先輩。

ト：趣味…つーか、トラ転がすのは嫌いじゃねえ。特技…あ……思いつかねえな。ケンカか？

魚：トラ…を転がす…？

牛：リアルビンテージのボンネビル（改）トライトン・レーサーだ。草：要はバイクに乗るのが好きって事だね。ボクは美容…。特技は利き植物用栄養剤だよっ。

牛：趣味は仏像彫り。特技は射撃。

骨：趣味、女の子をはべらす事！特技、女の子をはべらす事！生き

がい、女の子をはべらす事！

草：スケルン、一貫してるねー。じゃあさ、もし世の中から女の子がいなくなったらどうするのー？

骨：死ぬ。

草：うわあ、真顔だ。

魚：いくらなんでも、そんな簡単に死なないで下さいスケルン先輩……。

ト：さすがタツちゃん先輩！常人には出来ない特技を平気で持っているッ！そこにシビれる！あこがれるウ！今度、ぜひ教えて下さいっ！

牛：……この国にいる限り必要のない技能だ、リザード。

ト：分かりました、タツちゃん先輩！止めておきます！

山田、一連の流れに啞然。……誰か、ツツコミプリーズ。

山：えっ……えー、では、次の質問っ。学生時代の思い出を何でもいいので1つ教えて下さい。

魚：学生時代か……。あの頃はまだ故郷の海にいたんだよね。みんな元気かなあ。……。

山：……パパン先輩が物思いに耽ってしまったようなので、先にリツちゃん先輩お願いします。

ト：つつてもなあ……。番だ何だと小せえシマあ奪い合ってケンカしてた覚えしかねえ。

草：リツちゃんたらバイオレンスう。ボクは、高校で生徒会長をしてたんだよー。生徒（というか、ボク）がより良い学生生活を送れるように（理事長他教師陣を脅して）古めかしい校則を新しくしたり、（主に目障りな人種を排除するという形の）校内美化を徹底したり。

山：そ……、そうですか。（何だか合間合間に聞こえてはいけない心の声が聞こえたような……）

牛：飛び級でさっさと終わらせちまつたし、思い出という程のものは無いな…。

山：飛び級って…一体、どこの国にいたんですかタッチちゃん先輩…。

骨：オレは高校時代、バレンタインチョコを3ケタは貰ってたぜーっ。H A H A H A！羨ましいだろ、山田っ。妬んでもいいぜ！

山：…遠慮しておきます。

骨：なんだよ、つまんねーなあ。若さが足んねーよ、若さが。もつとノってこーぜっ。

山田の肩に腕を乗せる骨。それを外しながら質問用紙に目を通す山田。

山：はいはい。まだまだ行きますよー。質問その5、初恋はいつですか？

魚：えっと、お恥ずかしながら…まだです。

ト：んなの、いちいち覚えてねーよ。

草：またまたリツちゃんたら照れちゃってー。ま、いいけど。ボクは幼稚園の時かな？

牛：アレをそう呼んで許されるのなら、十代半ばだな…。

骨：産まれた瞬間からオレは世界中の女に恋をしていた。（組んだ手に顎を置いてキメ顔）

山：はいっ、次いきましよう、次っ。

山：質問その6。自分以外の4人に対する初対面での印象をお願いします。

草：うわあ、中々エゲツない質問来たねえ。

骨：いや。そりゃあ、単にドリー先輩が腹ぐ……ナンデモナイデス。魚：じゃあ、皆さん。僕に対する印象を教えてください。

ト：楽勝で勝てる。

草：気弱そう。ホストとしてやっていけるのか心配。

牛：オタマジャクシだな。

骨：うはーっ。マジもんのマーマンだ、ウロコやつべえー。って感じか？

山：…大概ひどいですね。ところであのー、タツちゃん先輩のオタマジャクシって何ですか。

魚：ああ、子供の頃の僕の事だと思う。彼とは結構長い付き合いだから。

ト：次は俺様だな。

魚：えっと、ごめんなさいっ。ちよっと怖そうだと思いました。

草：御し易し。

牛：気骨のありそうな男だと思ったな。

骨：なんだコイツ、気に入らねえ。ム力つく。

ト：……くつく、奇遇だなあ骨野郎。俺様もお前と全く同じ感想だ。骨：オレとテメエが未来永劫相容れない存在だってえのは宿命レベルで信じられるぜえー、クソ爬虫類よお。

草：ちよっとおー。次、ボクの番なんだから変な空気出さないでよー。

骨：ひいつ、スンマセンっしたあー！

ト：あー。すみません、ドリー先輩。気を付けます。

草：はいっ、じゃあボクの印象お願いしまーすっ。

魚：最初は、どうしてホストクラブに子供が？とビックリしました。

ト：タツちゃん先輩の先輩。偉い。

牛：底知れねえ。

骨：ナンテカワイインダロウナート思イマシタ。

草：なんで片言？

牛：次は俺か…。

魚：物心ついた頃にはもう知り合いだったから、初対面の印象というのは無いです。とても優しい人だと思います。

ト：タツちゃん先輩を見て、自分がいかにガキだったか思い知ったぜ。

草：どんな経験をしてきたのか知らないけど…。とりあえず、一目でこの男は敵に回すべきじゃないと分かったねえ。

骨：この世にやあ一生適わねえ人間ってのがいるもんだと心から理解したわ。いやー、懐かしい。

何か思うところがあるのか、それぞれ感慨深げにうんうんと頷いている。

骨：おつ、最後はオレだな。

魚：ふふ。楽しい人だなと思いましたよ。今も思っていますけど。

ト：最初はこんなヒョロい奴、簡単に潰せると思ったんだが…。だからこそ、余計に気に入らねえ。

草：いやあー、活きの良いのが入ってきたなあーって感じっ？…ふふ。

牛：一本、芯が通ってる。

骨：何か寒気がっ！？…くっ、いつものテンションを思い出せオレっ。ビー・ホット。ビー・ホット。

山：えー…つと、質問その？。生きる上でのモットーや座右の銘などありましたら教えて下さい。

魚：何だろう。人に優しく…とか。

ト：先手必勝だな。

骨：はんっ、なあにが必勝。んなこたあ、オレに勝ってから言いやがれっつーの。

ト：何か言ったか、骨野郎。

ダンっとテーブルを叩いたトカゲと頬杖をついた骨がまたもや睨み合う。

魚：あの。先輩方…お互いにお互いを煽るのは、もうその辺で止めた方が……。

草：あーあー、パパンにまで言わせちゃって。…でも命拾いしたねえ。仏の顔も3度まで、ボクの忠告も3度までっ。あ、座右の銘は備えあれば憂いなしかなっ。

山：3度を超えたらどうなるのか知りたいような知りたくないような…。

牛：俺の場合は…… 人事を尽くして天命を待つ、ってトコか。

骨：今さら言うまでもねえが、オレは生涯ハーレムをモットーに生きてるぜーえ。

山：スケルン先輩は本当に今さらですね。

山：では、質問その8。好きな食べ物？

草：うわぁ。それこそ最初の方の質問でしょ、コレ。

魚：まあまあ、ドリー先輩。…僕はシーザーサラダとか好きだよ。

ト：カラアゲ。

草：リッちゃん、いつも食べてるよねえ。ボク、チョコパフェが好きーっ。

骨：本当は？

草：あたりめ。って、何言わせるのスケルンっ。ちよっと山田、今の違うからねっ。

牛：…… ミネストローネ。

骨：っしや、一矢報いたっ。 あっ、オレは煮付け系なら何でもイケるっ。

山：後で絶対やり返されるだろうに、よくやりますね…スケルン先輩。（小声）

山：お。いよいよ、あと2問ですよ。質問その9、子供のころの夢は？

魚：幼稚園くらいの時は考古学博士になりたかったなあ。

ト：格闘王。最強って立場は男なら誰でも1度は憧れるもんだろ。

草：大統領かなつ。まあ、何でもいいから1番偉い人っていうのになつてみたかつたんだよね。

牛：……自由。

骨：モテキング一択つ。まだガキの頃はハーレムって言葉を知らなかったんだよなあ！。

山：まともな子供がいねえ！……つと、失礼しました。皆さん素晴らしい夢をお持ちだったんですね。うん。はい。

山：では、ラストの質問いきます。ホスト以外でなつてみたい職業は？

魚：これは…、中々難しい質問だね。んー…理学療法士？

骨：うわメツチャばいっつか、むしろなぜホストを選んだのかと！

ト：っせーな、骨。無駄な詮索してんじゃねえぞ。……俺様はボデ

イガードだな。（チラチラとタツちゃんを見つつ）

草：職業とは違つかもしれないけど、株の取引きとかやつてみたいなー。

山：嫌な予感しかشませんが…。

牛：俺は大型動物の調教師に憧れるな。熊や虎を懷かせて演技を覚えさせるのは楽しそうだ。

草：タツちゃんならあつさり出来そうと思つたのはボクだけ？

魚：あ、僕も思いました。

山：自分も同意です。

ト：タツちゃん先輩に不可能は無い！

骨：新興宗教の信者かつつの…。オレはホストじゃないなら、大人しくヒモでもしてるわ。

山：うわぁ……。

山：あつ、質問はこれで終了です。最後に、オーナーに向けて何か一言あればどうぞ。

魚：えつと…、こんな良い職場に雇っていただいて本当に感謝します。

ト：警備員ども雑魚すぎだろ。早いトコ次のヤツ用意しろ。

山：そもそも新しい人が雇われる度にケンカをふっかけるのはどうなんですか、リツちゃん先輩。

魚：まあまあ、山田君。リツちゃん先輩の行動はお店を大事に思う心の表れだから…。

草：気持ちは分からなくも無いけど、非常識ではあるねえ。あつ、オーナー。貯蔵庫の奥に隠してあった高級ワインとっても美味しかったですつ。

山：つて、アンタも何やってんですかドリー先輩！？非常識さはドッコイドッコイですよっ！

牛：…まだしばらく世話になる。

骨：イエーイ、オーナー最高ーっ！今後ともおー、ハッピーうれピーよろピくねーッ！ッヒュー！

山：……っはい。ということで、以上で会談はお開きとなります。先輩方、本日はお忙しい中ご協力いただきありがとうございました。お疲れ様でした。

ファン会報より抜粋（後書き）

レジェンズ会報：月1ペースで発行中。定期購読がお得。企画や制作は中堅以下のホストがローテーションで行い、文章の編集やページデザイン等はホール担当と厨房担当の有志により行われている。オーナーの最終チェックの後、専属契約している業者により印刷・発送。バックナンバーも購入可能で、トップ5のプロフィールなどが掲載された号は特に売れ行きが良い。

オーナー…誰もが知ってる謎の人。

奴らとんでもないものを盗んでいました。…老女のハートです。

ある晴れた日の夕方。

信号の無い横断歩道の前に、大きく重そうな旅行鞆と今時珍しい巾着を持った着物のおばあさんが立っていました。

彼女は横断歩道を渡るタイミングが掴めず、オロオロと立ち往生しているようです。

そんなおばあさんの姿を見かねて背後から近づく一つの影がありました。

タツちゃんの場合

「手伝おう。」

思わず艶声をあげたくなるような色っぽい重低音ボイスで一言そう告げると、タツちゃんはごく自然な動作でおばあさんの鞆を自らのゴツくもしなやかな右手に持ち上げました。

突然の事に驚いて、おばあさんは背の高い彼を見上げます。

雄々しいツノ、厳しさと愛情深さをたたえた緑の瞳、壮大な大地を連想させる焦げ茶の毛皮。

その顔を確認した直後、「まあ」という感嘆の声と共に彼女の頬がバラ色に染まりました。

タツちゃんの男らしい凛々しさと垂れ流しのフェロモンに、無意識に頬へと手を置きポウッと見惚れるおばあさん。

そんな彼女に対し、彼は微笑ましそうに目を細めながら空いてい

る左手をすつと差し出します。

「差し支え無ければ、手を。」

…… ああ。連れ合いに悪いと言うことなら無理強いはいしない。」

彼の気遣い溢れる発言に、おばあさんは自分の胸が年甲斐も無く高鳴っていくのを感じました。

それは少し恥ずかしくもありましたが、とはいえ、そんな程度の事で無駄に年を取っていない彼女がこのように素晴らしいチャンスをみすみす逃すはずありません。

老人とは思えない素早さでタツちゃんの手をしっかりと掴んで、おばあさんはにっこりと満面の笑みを浮かべました。

「夫の事なら大丈夫よ。ありがとう、素敵なお兄さん。」

さすがは欲望都市シルバーバレーの頂点に立つ男といったところでしょうか。

そう言ったおばあさんは、もうすっかり女の顔をしていました。

おじいさん、草葉の陰から涙目です。

タツちゃんは自分の左腕が彼女の支えになるように軽く曲げて、それはそれはスマートにエスコートしてみせます。

歩き始めた彼の足は、おばあさんに合わせてとてもゆっくり動いていました。

それから、特に何かが起きる事も無く二人はつつながく横断歩道を渡り終えます。

おばあさんはタツちゃんから自分の手が離されるのを名残惜しげに眺めた後、彼の目を見つめながらお礼の言葉を述べました。

「とても助かったわ。どうもありがとう。」

貴方さえ良ければ、これからでもお礼をさせてもらいたいのだけど。」

「……悪いが、仕事だ。それに、礼をされるほどの事はしていない。」

「謙虚なのねえ。ちなみにどんなお仕事を？」

問われて、タツちゃんは口で答える代わりに紫色をしたスーツの内側から慣れた手つきで名刺を取り出しました。

受け取った名刺に目を通して、おばあさんは驚いたように声を上げます。

「……まあ、ホストクラブ？」

「そういう訳だ。アンタのような人間はあまり関わらない方がいい。」

淡々と告げられるタツちゃんの言葉。

だと言つのに、おばあさんは彼を見上げ至極楽しげに笑いかけました。

「あらっ、初めて会った貴方に私がどんな人間かお分かりになって？
うふふ。私、貴方の事とても気に入ったの。今度、必ずお店に伺わせてもらっわ。」

一歩も引きそうにない彼女の様子を見て、タツちゃんは諦めたようにため息を吐きます。

そして、肩をすくめながら苦笑い気味にこう言いました。

「……参った。アンタは良い女だな。」

微笑みあうタツちゃんとおばあさん。
こうしてまた一人、彼は熱心な常連客を増やしたのです。

リッちゃんの場合

「テメエの体力も把握してねえのかよ、ばーさん。
そーいうのを年寄りの冷や水つつーんだ、阿呆。」

唐突に吐き捨てられた暴言に、おばあさんはギョツとして声の聞こえた方へと振り返ります。

その先には一見してガラの悪そうな、大きく引き締まった体躯を持つリザードマンが立っていました。

「オラ、荷物貸せ。」

おばあさんが口を開く暇も無く、リッちゃんはひったくるような乱暴な動作で彼女の手から重い鞆を奪います。

そして、彼はそのまま一人で横断歩道へと出て行きました。

「えっ。……あ、あのっ?」

戸惑うおばあさん。

声をかけられたリッちゃんは足を止め、面倒臭そうに身体を反転させました。

その顔は怪訝に歪められており、彼女は少しかり恐怖に身を竦ませます。

そんなおばあさんの様子に気がつかないのか、表情そのまま不機

嫌丸出しの低い声を発するリツちゃん。

「……んだよ、渡りたいんじゃないかねえのか？」

この俺様が待ってやってんだ、さっさと来ねえと置いてくぞ。」

耳に届いたセリフにようやく彼の意図を察したおばあさんは、ホッと胸を撫で下ろしました。

やり方はともかく、単に親切心からの行動だと分かったからです。そうとなれば、彼女はいそいそと横断歩道の上を歩き始めます。

ようやく追いついた彼に視線を合わせて、おばあさんは苦笑しつつ言いました。

「すみませんねえ。」

「別についでだ。つつーか、ばーさん。そういうのウゼエから止める。」

尾を地面にピシヤリと一発打ちつけつつ素っ気なく返したリツちゃん。

しかし、彼はおばあさんの前方を先ほどよりも目に見えて遅いスピードで歩き出します。

ツンデレという概念のない老人相手にあまり褒められた態度ではありませんが、何となく彼が恥ずかしがり屋なんだなという事を察したおばあさんは微笑ましそうに目の前の大きな背を見つめるのでした。

渡り終わった先で荷物を返してもらったおばあさんは、深々と頭を下げながらお礼の言葉を紡ぎます。

「どうも、親切に谢谢你们……。」

「ウルセエ、止めろつつたのが聞こえなかったか？
……まあいい。俺様はもう行くからな。」

そう宣言しグルリと彼女に背を向けるリッちゃん。
おばあさんは慌てて彼の上着の裾を掴みました。

「あ、待つて。何かお礼をさせてちょうだい。」

そんな彼女に対し、振り向きもせずに彼はこう言い放ちます。

「年寄りにタカる趣味はねえよ。」
「でもつ。」

さらに言い募ろうとするおばあさんへ軽く目を向けたリッちゃんは、小さく眉間に皺を寄せ苛立たしげにチツと舌打ちしました。
彼女の縋るような瞳に、少しばかり怯んでしまったからです。

「じゃあ、ばーさん。テメエ一人でここに来てみる。
来れたら礼でも何でも好きにさせてやる。」

ピンつと指で何かをはじくりッちゃん。
見事におばあさんの手に乗ったそれは、彼がレジエンスで使っている名刺でした。

「……ホスト……クラブ。」
「じゃあな。」

名刺を読み上げ呆然とするおばあさんに構わず、リッちゃんはその場からさっさと立ち去ってしまいます。

彼は、こんな上品な身なりの大人しそうなおばあさんがレジエン

ズになど来れる訳が無いとタ力をくくっていたのです。

しかし、こののち予想に反して常連にまでなってしまった彼女に、いつも通りの偉そうな態度で接しつつも、心の中で貴重な老後の蓄えを使わせる羽目になってしまったと罪悪感を覚えてしまっリツちやんでした。

スケルンの場合

「へーいつ、そこなお嬢さん！おっ困りーい？」

突然かけられた陽気な声にキョロキョロと辺りを見回すおばあさん。

今にもチエキラとでも言い出しそうなポーズを決めて、スケルンが彼女の視界に勢い良く飛び込んで来ました。

ギョツと軽く身を引くおばあさんを余所に、彼はいつものマシンガントークを開始します。

「なになに、ここ渡りたいの？つて、見りゃ分かるかーっ。あっはっは。」

オツケ。任せて任せてっ。オレってば、超たよりになる男だかね。

常連のお姫さんたちもキヤースケルンってなもんよ！

おっと。ダベってる暇があったら、早く渡れってんだよなあ？わ

り、わり！」

「きやあっ。」

彼のトークに圧倒されてポカンと口を開けている隙に、それはもう素早く慣れた手つきでスケルンはおばあさんを姫抱きにしました。連れ合いのおじいさんにすらそんな風にされた経験の無い彼女は、思わず取り乱してしまいます。

「なっ、いきなり何をつ…！」

けれど、スケルンはおばあさんの抗議の声を苦笑気味に受け流し、素早く横断歩道を渡り始めました。

「ごめんけど、ちょびーつと我慢してなー！」

あんまりのんびり進むとガラの悪い運転手とかにカラまれっかもしれねーからさあ。

そうじゃなくても、やつぱ迷惑になっちまうもんな。ここ結構交通量多いし。

あっ。いやいや、ぜんぜん全くこれっぽっちも役得とか思ってねーよ、ホント！

っそーだ。役得で思い出したけど、さっきの悲鳴ちよつと可愛すぎ！もう少しで血迷ってこのまま攫っちゃうトコだったぜー！

っつて、まあ、実際にはやらないけどな！オレって基本紳士だから！

てーか、それよりお姫様。ちよつと体重軽過ぎでございますよ？オレ心配になっちゃうじゃん！

って、うわあっ。バカ言ってる間に渡り終わっちまったっつーの！好きな事をしてる時間ほどすぐ過ぎるっつーけど、あれマジだよなあー。」

ベラベラベラベラと飽きもせずにはしゃべり続けながら意外と慎重かつ丁寧な足取りでおばあさんを運んでいたスケルンは、ようやく辿り着いた目的地に彼女を降ろします。

地に足のついたおばあさんは、ホッと小さく安堵の息を吐きました。

そんな彼女に、スケルンは自分の頭をカリカリ撫でながら心配そうに声をかけます。

「お嬢さん、大丈夫？骨が当たって痛く無かった？

肉がついてないのって、こういう時に不便だよなー。」

でさ、本当はその荷物とか一緒に持つてってやりたいトコなんだけど……。

これから仕事で、どうしても遅れらんなくてさ。

「っあー、お嬢さんみてえな可憐なレディを前に男の務めが果たせねーとかマジ屈辱だわー。」

唸りながら苦悩のポーズを取るスケルン。

ほんの少しの間にころころと表情を変える彼を見ていて、おばあさんは段々と可笑しい気分になってきました。

「ふふつ。貴方って、とっても面白い方なのねえ。」

初めておばあさんの方から声をかけられて、スケルンはハッと顔を上げます。

すると、そこには楽しそうに笑う彼女の姿がありました。

その笑顔に雰囲気はパアッと明るくした彼が再び止まらぬ口を開きます。

「うおーっ、ナイス・スマイル！やべえ、これは惚れる、やべえ！左手の指輪が無ければ速攻アピっただけどなあーっ、くっそ！いつやあー、お嬢さんみたいな大和撫子タイプの可憐なお嫁さん貰った旦那さんが心底羨ましいわ！」

「あら、お上手なのね。」

でも、あまり年寄りをからかうモノじゃありませんよ。」

少し困ったような笑顔に変わったおばあさんへ、スケルンが全身全霊で否定にかかりました。

「やーだなあ、オレ女の子にお世辞は言わない主義だつてえ！

女神と天女に誓ってもいいね！オレが女の子を褒める時はいつだつてザ 本気だつてな！

あつ、そーだ。今日、最後まで手伝つてあげられなかったお詫びつつーか償いつつーか、とにかく何かしたいからさ。

良かったら、連絡先とか教えてもらつていい？」

「まあ、お詫びだなんで……。けど、そうね。

私も今日のお礼がしたいから、貴方の連絡先が知りたいわ。」

その後、つつがなく互いの携帯番号を交換した二人が、お礼のお礼やお詫びのお詫びなどという終りの無い健全デートを繰り返すようになり、またレジエンスでのハーレム女性たちの中に度々彼女の姿が見られるようになった、というのはまた別のお話。

ドリーの場合

「ねえねえ、おばあちゃん。お荷物とっても重そうだねっ、大丈夫？ボク何か役に立てる？」

きやるんつと小首を傾げながらおばあさんの顔を下から覗き込むドリー。

その様子に、おばあさんは「あらまあ」と微笑ましげに眼を細め

ました。

「うふふ、優しいのねえ。

じゃあ、この横断歩道を渡るのを手伝って貰っても良いかしら？」

「うんっ、分かったっ。」

無邪気な笑顔で元気いっぱい返事をしたドリーは、素早くバンザイの恰好を取ったかと思うとその指先から茶色の蔓を伸ばし始めます。

それがすごい勢いで何かの形を成していく様子を、おばあさんは啞然とした表情で眺めていました。

彼女はマンドレイクに出会った事も初めてなら、その能力を見る事も初めてだったのです。

それから、一分と経たない内に彼女の目の前に成人男性サイズの蔓の人形が出来上がりました。

ドリーの手から伸びる幾筋もの線で繋がった状態の人形は、彼がチヨイチヨイと指を動かし繰る事でまるで本物の人間のような動きを見せます。

その完成度に満足げに頷いたドリーは、クリッと顔をおばあさんの方へと上げて言いました。

「おばあちゃまつ。人形の右腕に荷物をかけてっ。」

「えっ。あっ……え、ええ。」

未だ驚きから戻りきっていない彼女は、ドリーに言われるがまま自身の旅行鞆を差し出される人形の腕に通します。

すると、しっかり荷物の持ち手部分を挟み込んだ人形は、今度は身体を横向きに変え彼女へ左腕を差し出しました。

唐突なその行動に、どうすれば良いのか分からず困惑するおばあ

さん。

「ええつと？」

「渡る時に、その左腕を支えにしたら良いよつ。」

そういう事かと納得した彼女は、恐る恐る人形の腕に手を置きま
した。

ガッチリ組まれた蔓は固く、それでいて、意外と滑らかな触り心
地です。

へえ、と指で蔓の感触を確かめている間に車道の様子をうかがっ
ていたドリーが言いました。

「おばあちゃま、ちょうど車がいなくなつたよ。」

今の内に渡つちゃおつ。」

おばあさんは、彼に促されるままに足を横断歩道へと踏み出しま
す。

寄る年波には勝てず、彼女の歩みは悲しいほどに遅いものであり
ましたが、途中でやって来た車も珍しい蔓人形に目が行ってその速
度を気にしてはいないようでした。

おかげで、おばあさんも落ち着いた気分で歩を進めることが出来、
反対側の歩道に辿り着いた時にはすっかり感激しているようでした。
人形をバラし蔓を身の内に収めた彼へ、彼女は心からの笑顔を向
けながら優しくお礼の言葉を紡ぎます。

「本当にありがとうね、ボク。とっても、とっても助かったわ。」

「ううん、このくらいお安い御用だよ。」

無事に渡れてよかったね、おばあちゃまつ。」

「……ううん。何かお礼が出来たら良いんだけど、今はめばしい物
も持っていないわねえ。」

軽く巾着や鞆の中身を確認しながら残念そうに呟くおばあさん。
そんな彼女の様子を見て、ドリーはさも良い事を思いついたと言わんばかりの表情でこう提案しました。

「お礼だったら、おばあさまつ。今度、ぜひボクが働いているお店に遊びに来てよ。」

「お店？」

「うんつ。ボク、シルバーバレーのレジエンスってホストクラブで働いてるの。」

はいっ、これボクの名刺。」

説明しながら頭の葉の隙間から名刺を取り出し手渡すと、おばあさんは「まあっ！」と大仰に驚いた後、それはそれは真剣な顔をして彼を問い詰め始めます。

「そんなところでお仕事なんて、本当に大丈夫なの？」

もし、無理に働かされているのなら私が相談に乗りますよ。」

「あはっ、やだなあ。ボクなら大丈夫だよ？」

オーナーだって、同じホストの人たちだって、お客さんだって、みんなみんな優しいもん。」

「……………そう。」

それなら良いんだけど…………。」

とは言いつつ、どこか納得のいつていない様子のおばあさん。

それから数日後。心配になって彼の様子を見にレジエンスを訪れた彼女が、逆に新しい世界の扉を開いてしまうなどと、今のおばあさんには全く知る由もありませんでした。

パパンの場合

「あの…、おばあさん。大丈夫ですか？
僕で良ければ、ぜひお手伝いさせて下さい。」

そう声をかけて彼女へとそっと手を伸ばしてきたのは、美しい鱗を持つマーマンでした。

眼鏡の奥の優しい瞳を目にしたおばあさんは、それが彼の純粋な親切心からの言葉だと分かり、ほんわり自らの胸の内が温かくなつていくのを感じます。

「この横断歩道を渡りたいんですよ？
どうぞ、ご一緒させて下さい。」

あ。渡る間でよろしければ、お荷物お持ちしましょうか？」

「あらあら、まあまあ。ご親切にどうもありがとう。」

お言葉に甘えて、お願いしても良いかしら？」

「ええ、勿論です。」

微笑むおばあさんからそう頼まれたパパンは、それは嬉しそうに頷きます。

種族がマーマンである。たったそれだけで、意味なく避けられたり裏を疑われたりすることもあった彼にとって、彼女の態度はとても喜ばしいものでありました。

右手に荷物を、左手におばあさんの手を取ったパパンはタイミングを見計らい横断歩道へと足を踏み出します。

当然、その前に彼女に声をかける事も忘れません。

「さあ、行きましょうか。」

…ああ、車道に降りる時は段差に気を付けて下さいね。」

また、それだけに飽き足らず、彼は渡っている間中おばあさんへの細かい気配りを見せます。

「慌てないで。ゆっくりで大丈夫ですよ。」

「いざという時は、僕が必ず貴方を守ってみせますからね。」

「進み方は早くないですか？」

もう少しこちらへ体重をかけてもいいんですよ。」

さらに、合間にやってきた車に楚々とした動作で会釈するパパン。その姿はさながら善人の鏡といった様子です。

おばあさんは彼の言葉に返事をする裏で、今どきこんなにも心の美しい人がいるもののねえとしきりに感心していました。

「ああ、貴方のおかげでこうして無事に横断歩道を渡る事が出来たわ。ありがとう。」

何かお礼を…と言いたところだけれど、あいにく持ち合わせが無くて……。

後日、改めてでも良いかしら。連絡先を覚えていただける？」

「とんでもないっ。そんなつもりでお手伝いしたわけじゃありませんからっ。」

おばあさんのセリフに慌てて首を横に振るパパン。それを微笑ましそうに見つめ頷きながら、彼女は再び口を開きます。

「ええ、ええ、もちろん。分かっていますよ。」

お礼をしたいと言うのは、私の我がままなの。

どうか、老い先短いこの年寄りのお願いを叶えてはいただけないかしら。」

このように言われてしまえば、心優しいパパンが断れるわけもありません。

そうつ事なら…と彼は懷から一枚の名刺を取り出しました。

「これに僕の携帯電話の番号が書いています。

夜の接客中は出られないかもしれませんが、日中は大丈夫かと思えますのでいつでもご連絡下さい。」

「あらっ、まあ…。貴方ホストクラブにお勤めなの……？」

目を見開いて問うてくるおばあさんに、名刺を渡したのは不味かつたかなと今さらながら心配になってしまふパパン。

ホストと聞いて真っ先に悪いイメージが浮かぶ人間は少なくありませんし、年寄りともなればその傾向はことさら顕著です。

「あ……ええ、そうです。

でも、僕の働いているレジエンスは値段も良心的ですし、店内も広く清潔で……。」

「ああ、いえ。珍しいお仕事だったから、ちょっと驚いただけなのよ。」

しかし、焦り気味に口を開くパパンにおばあさんは予想外の言葉をかけてきました。

「ねえ。お礼って、直接お仕事先に伺ってもよろしくて？」

私、貴方みたいな方が勤めているっていうこのホストクラブに興味が出たの。」

「えっ？」

そう告げる彼女の瞳は好奇心いっぱいに輝いており、とても慰めの嘘やその場限りの社交辞令を述べているようには見えません。

戸惑いながらも頷いた後日。本当にレジエンスへと姿を現したおばあさん。

帰る頃にはすっかりお店を気に入り、それから彼女が熱心な常連客となるまでにそう時間はかからなかった、という話です。

奴らとんでもないものを盗んでいきました。…老女のハートです。（後書き）

スケルンの守備範囲は「ゆりかごから墓場まで」です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2169y/>

ただし情熱は鼻から出る

2011年12月25日21時46分発行